



身体を拓く

表現を追い続ける子どもたち

野沢温泉村立市川小学校田中学級のこれまで
リトミック研究センター長野第一支局 北島由美

担任の田中和幸氏は、子どもたちの生きる力を育む教育にどっぷりつかりたい... そのためには核となる活動を学級に据えて、とことん子どもたちとはまりこめる学習の展開を試みる必要があると感じてきた。こうした考えは田中氏が初任校で出逢った、元三郷小学校長本山秀郎先生の教えが土台となっている。

現在に至るまで中学校勤務を除いて、県内の三郷小、山ノ内東小、附属長野小、などで動物の飼育を通じ子どもとともに人間として生きる意味を問い続けてきた。今回の「公演」に先だち、田中氏が平成15年度より赴任した市川小で、7人の子どもたちと過ごしてきた3年間の日々を簡単に書いてみたい。

田中学級の子どもたちは、... 知らず知らずのうちに一人ひとりが自分の言葉で最後まで語るようになる... そして、その話をみんなが一生懸命聞く雰囲気が出来てきたと感じると先生は、そのクラスの中核活動に何をすすめるか模索し始める。子どもの毎日の会話の中から、学校でのやり取りの中から、疑問や興味を注意深く聞き出しながら、全員が必死になって取り組める事柄を迷いながら探していくのである。これまでヒツジやガチョウの飼育を低学年の中核活動としてすすえてきた田中氏は市川小においても、着任早々、核となる活動を模索し始めていた。しかし何せクラス全体で7人だけという状況の中で大きな動物飼育はできるのか？ウサギ飼育を1年経た目の前の子どもたちにとって再び動物飼育に挑むことは有意義なの

だろうか?... 不安を抱いたまま日々が過ぎ、7人がはまり込める題材がなかなか見えてこなかった。

田中氏の求める「生きる力を育む教育」は「子どもの生活に根ざすところから...」という考えによる。これは初任校の本山秀郎先生が絶えずさまざまな実践を通しておっしゃっていたことであり、田中氏が自身のバックボーンとして、これまでそしてこれからも学び続けることに相違ない。

田中氏の中で何かが動き出したと確信できるのは、氏が附属長野小時代に諸先輩の先生方を通して学んだ「淀川茂重先生」と「長野小の教育哲学」によるところが大きい。「淀川茂重先生」は、大正時代、長野小の前身である長野師範学校において、学級の子どもたちに「青い鳥」の脚本を演劇としていくことを試みたり、低学年の時にはにわとりを育て、小屋作りを具体の生活に即して位置づけたりすることで、「数」や「金銭」にふれて学ばせたという。こうした教育の姿勢は今日に至るまでも数々の批判を受けてきたというが、実際にこうした世間からの向かい風にも、その灯を消すことなく「児童の教育は児童に立ち返らなければならない。児童のうちから構成されるものである」という理念のもと受け継がれてきた。この総合学習の根を私が聞き得た時、音楽の領域にとどまらず全人教育をめざしたリトミックと総合学習の大きな重なりを見いだした。

生き物を飼うところに待ったはない... 必要感あふれた毎日である。絶えずそのときに一番良いことを考えていかなければ、対象は死んでしまうのである。音に即時に反応する、自分の感じたものを自分らしく表現する、周りの人やものとの調和を瞬時に判断し実行することなどをさまざまな音楽を媒体として行うリトミックにも、やはり待ったはない。個々の独創性が失われてしまうからである。その子がその子らしく今を生きるための総合、音楽教育の中でのリトミック、こうした「その子らしさ」をなにより大切にすることを願う気持ちは私の中で日に日に大きくなっていった。

田中氏より学級でリトミックをやってみないかというお話をいただいたのは、7人の2年生がクラスの中で自分の言葉で語るようになった1学期の半ば頃だったか。教室を訪れた時、子どもたちの天真爛漫な人懐こさにこちらが思わずたじろぐほどだった。学級訪問者に対し、物怖じせず話しかけ、自分を語り、その内容が興味津々と学級の話題になっていく。2年生当初先生からの問いかけに何も反応しなかった子どもたちだったという話が信じられないほどであった。それなのに田中氏から発せられた言葉はこうであった。

「とにかく硬いんだ。自分を表現できない。この教室の中ではようやく語れるようになったけれど、ここから一歩外に出ると別人になってしまう。身体を拓けない。」

それが実感として伝わったのは私が7人とリトミックをやってからだった。まわりを気にしないで動くことに対する抵抗感の大きさ、一人になれない依存心、発想の乏しさ、・・・教室で生き生き語る7人とはまるで別人であった。経験不足の一言ではすまされない大きな壁を感じないではいられなかった。子どもたちの身体を拓くこと、これが私たちの目指すところとなった。

その頃の子どもたちは校舎の前にある畳2畳ほどの畑にとうもろこしを作り始めていた。とうもろこし作りからまたさまざまな学習が広がっていく。そこからオペレッタ「トウモクんの旅～野菜王国物語～」が誕生した。シナリオ台本作りは子どもたちである。配役まで大まかに出来たところにお邪魔したら、役どころが一人一人にうってつけて驚く。すべてが子どもたちのアイデアとのこと。さらに、セリフは覚えるのではなく、大まかなストーリーだけ決めてあとはその日その日で味付けを変えていく。その瞬間の気持ちで相手に語りそれを受けて答えていく。歌も子どもたちから自然発生してきた歌から拾い、そこに伴奏をつけるだけ。私自身このときのオペレッタで、子どもの動きに即興的にタイミングをみはからい音を入れていくスリリングな体験をすることが出来た。子どもたちの演技力はなかなかであったように思う。しかし子どもたちが本当に身体を拓いていたわけではなかった...

リトミックではプラスチックアニメ(音楽の視覚化)という分野の練習として、「音を聴いて自分のイメージで動く」という課題をやる。ある時、エナジ-チャイムという楽器を使ってその音を聴いて身体を動かす課題を提示した。しかし、音の高低長短などに対して7人

が反応したのは手のわずかな動きだけだった。身体全部を使って表現したり、友だちとはちがう動きで伝えることがなかなかできないのである。この動くことへのためらいは生活全般に及んだ。学級ではたくさんの気づきがあっても全校の前では口を閉ざす。立場が強いものの意見をおかしいと思っても反論できない・・・など。そこからだった。7人の挑戦が始まったのは、多分頭の中で思っている体が思うようについてこない、周囲の視線が気になる、そういう悪循環の中で7人はもがいていたのだと思う。そんな7人に対する田中氏と子どもたちのやりとりは外から見ても容赦なかった。子どもたちに何か言う時の田中氏は、必ず自身が「自分ならこうする」と身体丸ごとで語る。それなのに子どもたちは呪縛にでもあったかのようにただ座り続ける...。そこに変化が表れたのはいつぐらいだったか・・・。「すわってないでやろうよ」ことばでどんなにかっこいいことを言うより、まず身体を動かすこと、そこに一人また一人と到達していったのである。子どもたちの語りに身体の表現が加わっていった。

3年生になり、7人は「売れるとうもろこしをたくさん作ってそれを売り、自分たちの力で校歌をつくった人の軌跡をたどりたい」という願いから、広大な土地を地域の方より借用し2000本のとうもろこし作りが始まった。7人で荒地を畑にしていくだけでも気の遠くなる仕事である。「待った」なしの挑戦が始まった。7人の教室は場所を畑に変えた。発芽・苗の定植・水遣り・雑草、病害虫とのかかわり・周辺の野生動物による食い荒らし・・・日々持ち上がる難題に知恵を絞り、ただただ身体を動かした。だから狸がとうもろこしを食い荒らした時も「ごんぎつね」を題材として、ごんと兵十の気持ちに自らの体験からくる思いを重ねてとことん話しあった。ひとりひとりのとらえ方の違いは、そのままとうもろこしと関わるそれぞれの違いだった。この年、音楽劇『ごんぎつね』を音楽会で取り上げ、たったひとことを自分はどう語るか、最後歌い上げた時どんな気持ちが胸に落ちるか、納得のいくまで自分自身と向き合った。

7人の日常の疑問や会話は時としてとんでもない方面への学習に繋がっていく。限りない可能性の中から田中氏は幹が太く根を張り巡らすであろう課題を吟味し子どもたちに選択させていく。またそのときはまだ幹は細くても、何かにつながってきそうなものは、黒板の隅に残しておく。以前の動物飼育とは離れたところでも、子どもたちの探究心がさまざまな学習を呼び込んでいく様子に、飼育とは違った中核活動の一面を確信したのだと思う。

私は教室を訪れるたびに、子どもたちがより柔らかな発想で、友だちとの関わりを大切に育てている様子を肌で感じるようになり、この子たちに本物と出あって欲しいことを願うようになった。勿論それまでも、とうもろこしづくりのエキスパート、野菜を流通させている仲買人といわれる人、山で働く人、地域の人たちと普通の学校生活の中だけでは出会うはずのない人たちと出会い、その繋がりを大切にしてきた学級であった。が、子どもたちの可能性を間近にしていたら、もしかしたらもっと変わるのではないか・・・そんな欲が私の中にも生まれていた。

「子どもたちに出会って欲しい人がいるのです。」
先生にそう切り出したのは3年生の夏ころだったか。



藤田桃子さんと私(北島)の出会いはリトミック研究センター-東京養成校第16期入学式(2003年4月)である。その時彼女は「ずっとマイムをやってきました。自分でまだ学ぶことはたくさんあるのですが、そろそろ子どもたちに私が伝えられることもあるんじゃないかと思うようになりました。」そう語った。日本パントマイム研究所を経て彼女とほか3名で結成した劇団「水と油」は、その年、第2回朝日舞台芸術賞「寺山修二賞」「キリンダンスサポ-ト」をダブル受賞した。リトミック研究センター-養成校に通いながらアジア、ヨーロッパ各国での公演をこなす彼女にいつごろか私は市川小の子どもたちの話をするようになっていた。そして最初は冗談半分に「長野にきてほしいなあ。」と言っていたことが市川の7人を見ていくことで私の中で必然になっていった。子どもたちの様子を聞いていたもちゃん(藤田さん)も時間さえ合えば絶対行くからと日程調整までするようになっていた。結果16年度末の3月上旬、藤田さんと小野寺さん(水と油リ-ダ-、藤田さんのパ-トナ-)の市川小訪問が決まった。その直前2月の「水と油」の東京公演を見た私はその舞台のすばらしさに圧倒され、自分があまりに無謀なお願いをしたことに気づいた。しかし藤田さん小野寺さんの市川小訪問は目前となっていた。

3月7日ふたりが市川小を訪れた。田中氏はせっかくの出逢いだからいつもの様子もみてもらおうと「ごんぎつね」学習の後、子どもたちの中から出てきていた信州新町の民話「あずきまんま」を演じる様子と、重力についての授業参観も用意していた。参観のあとになってわかったことなのだが、この授業が小野寺さんの気持ちを動かしていた。それは当初よくあるマイムのワ-クショップを予定していた小野寺さんが、授業参観の後、藤田さんに今日の予定を変えることを告げたのである。「この子どもたちには単なるマイムの入り口を見せるショ-でないことをやってみよう」と...

藤田さん小野寺さんはほんの少しの打ち合わせのあと全校生徒に対してマイムを演じた。7人の視線が釘付けになっていったことは言うまでもない。たった半日の滞在だったがそこから子どもたちの何かが変わっていった。

4年生になった子どもたちは相変わらず探究心旺盛だった。でも単なる提案だけだとクラスで取り上げられない。裏づけ、準備、周りを納得させるだけの資料等用意して初めてクラスの問題として位置づく。ただそんな中で「表現」が子どもたちのなかでははずせない課題として定着しつつあった。子どもたちの中に



パントマイムの不思議さ・憧れ・小野寺さん藤田さんへの思いがいつも見え隠れしていた。そして彼等の表現活動のひとつの表れとして「自分たちのつくるソーラン節」が座った。

2年生の頃、運動会で演じた「ソーラン節」は納得していない、やらされていた気がする。納得いくまで踊り続けたい。先生たちが作るのではなく自分たちでつくるソーラン節を踊りたい・・・そうして創ったソーラン節であったが、音楽会目前に担任よりストップがかかった。「出来」はそう悪くなかったはずである。でもそのわけを何より感じたのは子どもたちであった。うわべを見せるための表現であってはならない。自分がとことんはまりこみ、そこから生まれる表現。直前まで練習をさせてもらえず向かった音楽会の発表。そのすさまじさを、子どもたちも周りの大人たちも初めて体験した...。しかし7人はそこでもまだ満足しなかった。まだソ-ラン節は終わっていない。小野寺さん藤田さんに見てもらいたい。そしてパントマイムをやりたい。一緒にステ-ジに立ちたい・・・。「夢」はふくらむがそう簡単にはかなうものではない。かなえたくても無理なことはたくさんある。それを承知で7人は自分たちでパントマイム公演を企画した。何度も先生から無理だからやめようと言われても7人の気持ちは変わらなかった。

ここに書いてあることは田中氏と7人のごくごく一部ですべてをお知らせできないことがもどかしい気持ちです。ただこの公演が単なる思いつきで決まったのではなく、言ってみれば田中氏と7人の毎日の積み重ねの上にやっとかぎつけたものであること。更に、本気でたくさんの人たち(大人も子どもも)が関わり、巻き込まれてきたことを少しでもお伝えできればと思ってつづりました。田中氏からもこの文章を公にすることはやめて欲しいと何度も言われましたが、やはり外から見た田中学級を書くことなしにはこ

の公演を迎えられないと思いました。最後になりましたが小野寺さん藤田さんという世界的にも注目されているパントマイマ-お二人が真剣勝負で7人とこの公演に向かってくださったこと、そこには妥協はなく勿論大人と子どもといった関係でもない人間同士のぶつかり合いがあったことその誠意と情熱に心から敬意を表します。